

心温かい人々が暮らす町

- にぎやかそ美波町 -

○震災と人権

阪神淡路大震災から25年が過ぎ、東日本大震災から10年になります。今回は、災害時における被災者支援や避難所の在り方について新型コロナウイルス感染症感染防止をしつつ、どのように人権に配慮をすればよいのか、これまでの教訓を踏まえながら考えてみましょう。

○人を繋ぐ、命を紡ぐ

—地域で生きるために大切なこと—

美波町では、「誇りの空洞化」、「心の過疎」にならないよう、人口減少や過疎化が進もうとも、活気あふれるにぎやかな町であり続けることを目指し、まちづくりのキャッチフレーズを“にぎやかそ”にぎやかな過疎の町、美波町」と定めています。

一人ひとりの生き方として何が大事かという事を考え、地域社会で「交流」と「自治」を推進していかなければならないと考えます。誰もが生まれてきて良かったと思える町に美波町がなれば幸いです。

これから美波町は、人と人が繋がって、結果として災害に強い町になる必要があります。「災害に強い町」は、防災のために人と人が繋がるのではなく、普段からつながることが大事です。生きがいと居場所にあふれ、孤独死のない町となるように、交流と自治を念頭に「人と人が繋がる仕組み」を作っていかななくてはなりません。

「災害」とは何かを考えてみましょう。

災害によって当たり前の暮らしが奪われます。そのことにより、自分が生きづらいと感じることが起こります。「なんで自分たちは、こんな暮らしをしなければならないのか」、そう思う時、人権問題が自分の問題になったときだと考えます。災害によって避難所に、こんな問題が起きたらどうでしょうか。男女、国籍、障がい、肌の色、生まれた場所等のことで区別されそのことで生きづらいと感じたら、それは、人権問題です。違いを認め合い、平等に公助、共助を受けられる社会づくりを行うことが大切だと考えます。しかしながら、今、「自分の生活に関わって欲しくない。」そんな人々が多くなっているのも現実です。「震災によって日本人は「絆」の大切さを身に染みて知った。」と言われます。しかし「絆」の漢字の意味には、「ほだし」（手かせ・足かせ）という意味もあります。都市生活者にとって「絆」は「ほだし」であって迷惑と思われる方が増えています、そんな中でも災害時には、『「お互い様」という日本の文化に支えられた』、と云うことです。

実際、災害が起きたら避難所の在り方、感染対策、プライバシー保護等が必要とされます。困ったことを全部、誰かにやってもらうのではなくみんなで解決していくことが大切です。

出来るだけ避難前と同じ生活を確保できるようにするためには、臨機応変の対応力と行動力が必要です。そのために、自治体は努力し、町民の皆さんも協力していただき災害の困難を乗り越えられる美波町にしなければなりません。

「自分の仕事ではない」ではなく、積極的に普段から取り組んでいく人を増やすことが必要です。縦割りの分断でなく横軸にし、町民一丸となって災害時の困難に立ち向かって行って欲しいと思います。

町民一人ひとりが相手を思いやり、多様な価値観を認め合う社会をめざしましょう。

「心温かい人々が暮らす、にぎやかな過疎の町」美波町であり続けるために人権について考え守っていくことがまさに、“にぎやかそ”美波町づくりにつながります。このコーナーでは人権に対する思いを掲載していきます。